尾崎一雄全集

第六卷

尾崎一雄全集

第六卷

筑摩書房

尾崎一雄全集第六卷
昭和五十七年十二月二十日初版第一刷發行

著者　尾崎一雄
發行者　布川角左衞門
發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番號　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(營業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式會社精興社
製本　株式會社鈴木製本所
落丁・亂丁本はお取替致します

© K. OZAKI　Printed in Japan　0093-71206-4604

目

次

蟻・蜂・蜘蛛……三
秋の色……九
あだ名はボス……二四
祖父……三八
記憶のをかしさ……五三
玉樟……六七
三日月お圭……八〇
華燭の日……九三
石……一〇九
ボヤキの大岡……一二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

箱根越え……一四三
父の顔……一六三
何とかなるだらう……一八一
遺　品……一九八
丸い月……二一四
ある私小説家の憂鬱……二三三
ボンの死……二五一
川田宗吉とのつきあひ……二七一
川田への手紙……二九三
蟬の聲……三一一

柿……三三
末つ子物語……二四三
あとがき……五一一
後　記……五一三

尾崎一雄全集　第六巻

蟻・蜂・蜘蛛

蟻が何かくはへて、引つぱつてゐる。中型の、色の冴えぬ黒蟻である。裏庭で、掃き寄せた落葉に火をつけ、くすぼり燃える前に、ぼんやりこごんでゐたわけだが、ふと目についたその蟻の、例の如き熱心さを見てゐるうち、いたづらをしてやりたくなつた。

一匹では無理な荷物らしく、彼は非常な熱心さにもかゝはらず、それをほんのわづかしか動かすことが出來ない。しかし、わづかながら、動かしてはゐるのだ。

漸く三寸ほどの距離を運んだところで、私はそれをもとあつた邊りへ引戻した。

蟻は、不意に私の指先が現はれたので驚いたらしく、荷物を離して急速でその邊を駈け廻つたが、駈け廻つてゐるうち荷物に鼻先をぶつけると、またくはへて、引張り出した。荷物は、小さな甲蟲の胴體の一部らしい。

三度四度と同じ妨害を加へると、蟻は、妨害者のあることを意識したらしく、多少せき込み加減になつた。私は、蟻がさういふ反應を示したことに興味を覺え、焚火の方をお留守にして、蟻の方に向き直

つた。

蟻が汗をかくのかどうか知らないが――多分汗はかゝぬだらう――しかし見たところ、汗みづくと云つた恰好だ。荷物をくはへ、小石だらうが土塊だらうが、足のかゝるものは、避ければ樂な筈なのに、何でも彼でも踏み越えて、庭の東よりの畑の方角へ引張つてゆく。いくらか長目の左右の後肢を忙しく動かして足がかりを求める。

一尺ぐらゐ行つたところで、また引戻してやつた。彼は、引戻される荷物を追つかけてきた。これはちよつと意外だつた。それまでは、私の指が荷物に觸はると、とにかく荷を離したものだ。離して、荷物を見失はぬ程度のところを駈け廻り、私の指が引込むと、また荷にくらひつく。それを繰り返してゐたのだ。

この野郎、と思つた。私は爪の先で、蟻をさへぎつた。さすがに彼はちよつと逃げたが、指を引込めると、ダッシュするやうに荷物にくらひついて引張り出した。實に、いつこくな奴だ、と少し可笑しくなつた。

今度は、指先で荷物を壓へてみた。懸命の努力にもかかはらず、荷物は當然動かない。しかし蟻は、少しもひるまず、引張りつづける。身體を少しよぢつたり、身體の方向を變へたりして、夢中で引張る。

「駄目だよ」

さう云つて、指で蟻の頭に觸つた。離れたが、直ぐまたくらひついた。指でさへぎつても、その指をかいくぐるやうにしてくらひつく。そして、私が觸つても、もう荷物を離さうとしなくなつた。

その強情さには呆れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私は、ひねりつぶしてやらうかと思つた。しかし、見たところ、ひどく怒つてゐるやうな蟻の擧動が面白くて、つぶして了ふのも惜しいやうな氣がしてきた。

また一尺ほど進ませて置いて、荷物を壓へた。蟻は、無益に引張つてゐたが、ふと荷から離れ、荷の方に頭を向けたまま、前足で頭や觸角を撫で始めた。

「くたびれやがつたな」と私は獨りごとを云つた。確かに彼は疲れたらしく、ちよつと思案に餘つた樣子で、觸角を撫でてゐる。あきらめたのかな、と思つてゐると、急にまたくらひついて、引張り出した。

蟻はもう、私の指を怖がらなくなつた。指で追つても、離れない。私は荷物をつまんで、宙に上げてみた。

蟻は、くらひついたままだ。宙につるし上げられながら、何本かの足を、激しくうごかしてゐる。何の足がかりもない空中で、荷物を運ばうと、もがきつづけてゐる。

私は、彼の强情さにまつたく呆れ、

「勝手にしろ」と拋り出した。

うちの北側には、東西に走る小道があり、小道の北側は、高さ四尺ほどの石垣になつてゐる。石垣の長さは、四十間ぐらゐあるだらう。

ある晴れた朝、煙草をふかしながら、その小道をぶらぶらしてゐると、一匹のジガバチが、石垣に添つて、うろついてゐるのを發見した。黑いところへ、一本腹部に黃色の帶をした細身のこの蜂は、特色があるので直ぐそれと判る。

彼は、石垣の、石の間をのぞき廻つてゐるのだ。何をやつてゐるのだ、と見てゐるうちに、今蜂の入つた石の間から、一匹の中位の蜘蛛が、轉げるやうに飛び出してきた。蜘蛛は石垣から道路に飛び降りると、道を横ぎらうとして走り出したが、ジガバチがつづいて飛び出して、忽ち蜘蛛にからみついた。それはまつたく、からみついた、といふ感じだつた。そして、一瞬揉み合つたと思ふと、急に蜘蛛の動作はにぶくなり、やがてぐつたりとなつて、手足を胸のところへ縮めてしまつた。

うん、なるほど、と思つた。ジガバチが、蜘蛛や青蟲をつかまへ、その神經中樞に毒液を射して痲痺させる、これを土中に運んで犧牲者の身體に卵を產みつける——さういふことは、知識として知つてゐたが、實際に見るのは、これが初めてだつた。

私は、彼が、この自分より少し大きい蜘蛛を、どうしてどこへ運び、どんなふうに土中へ埋めるかを見たいと思つた。

蜂は、手足を縮め、仰向けにすくんでゐる蜘蛛の周りを、羽根をヒラ〳〵やりながら歩き廻つてゐる。いかにも精悍な、そして身輕な樣子だ。蜘蛛が全く參つて了ふのを、さうして待つてゐるのかも知れない。

するうち彼は、蜘蛛を腹の下にかかへると、いきなり道に添つて飛び出した。殆んど足が地につくぐらゐの低空飛翔である。私は、急いであとをつけた。

そこへ、近所の、鐵道へつとめてゐる人が、向うからやつて來た。汽車で通ふ人なので、小走りにやつてきて、挨拶も簡單に急いでいつてしまつた。その間に、私はジガバチの行方を見失つた。

夜、碁盤の置いてある八疊で、新聞の棋譜を竝べてゐると、大きな家蜘蛛が出てきた。この部屋は近年建て增したものだから、ここで育つた蜘蛛ではなく、舊屋の方から移動してきた奴に違ひない。隨分大きい蜘蛛だ。兩足をのばせば、五寸ぐらゐあるだらう。

そろりと寄つて來たので、手をその方にのばすと、彼はちよつと逃げた。

石を三つ四つ置いたら、また蜘蛛が近寄つて來た。電燈の光が私の身體で遮ぎられた薄暗い中に彼は居るので、その目が光つて見える。

追ひ拂はうと手を出したら、向つてきた。私はひどく意外な氣がし、同時に腹が立つて、いきなり彼を掌で强く拂ひ飛ばした。蜘蛛は、壁にぶつかつて、ぐたりとなつた。足をかすかに動かしてゐる。

生意氣な、と本氣で思ひながら、石をとつて盤面に置かうとすると、中指とくすり指の腹がチクリと痛んだ。掌をよく見ると、蜘蛛の身體の毛が、十本ぐらゐ指の腹に刺さつてゐるのだつた。それは剛毛と云ふべきもので、立派なトゲになつてゐた。

私は癪にさはりながら、そのトゲを一本一本拔いた。半分ほどは、折れて、除れなかつた。

未だ息のあるらしい蜘蛛を、古新聞で押へ、ぐる〳〵捲き込み、上から强く壓へて殺して、外に捨てた。私は念入りに彼を殺した。そいつが生返つたら、復讐にやつて來るかも知れぬと思つた。

私のところは、古家が手狹になつたので、八疊、四疊半、圖書室などを五年ほど前建て增したわけだが、それが舊屋の八疊や六疊とつながつてゐるので、そつちに舊くから住みついた蜘蛛やネズミや蛇などが、新屋の方へも移動するのだ。それらの生きものに、私は特別惡意は持つてゐなかつたのだが、この蜘蛛だけは別だ。腹が立つた。舊屋の八疊には、五年間も萬年床で病人生活をつづけてゐた。その間、

天井や壁にしばしば現はれる何匹かの大きな蜘蛛には、一種の親しみさへ覺えたものだ。彼らは、ときには私の枕もとに現はれ、また、私の夜着の上を横切つたりしたが、互ひに（尠なくとも私の方では）敵意を感じた覺えはない。ところが、碁石を竝べてゐる時出てきた奴は、向つてきた。こんなことは初めてだつた。いくら彼が大きいからとて、まさか私の指を餌と間違へるほどの柄ではなからう。天井裏で威張つてゐた癖を出し、「あつちへ行け」と私に云はれたことが癪に觸つたのでもあらうか。

秋の色

一

うちの周りの雜木の枝葉が生ひ茂つて、この三四年來、富士や箱根の眺めが不自由になつた。冬の間は、落葉する樹もあるので、いくらか見えてゐるが、四月頃からは駄目だ。

私が小學校、中學校の時分は、庭木類もほどよく手入れされてゐて、うちの客間からは、坐つてゐて富士山が眺められたものだ。大きくはないが古い松の枝の向うに富士山が見えるやうに、庭がつくられてゐた。別棟の二階からは、富士はもとより、その手前の箱根足柄連山が麓から見えた。南に向つては、相模灘がずうつと見えた。

その家は、關東大震災でつぶれて、その古材木で建てた小さな家に私共は今住んでゐるのだが、私が東京住ひの間に植木などは荒れてしまつて、雜木がいたづらに生ひ育つた。小さな家は、雜木の中に沈

んでゐるあんばいだ。

落葉といふと秋のもののやうになつてゐるが、それは落葉樹に限られるので、常盤木は春から夏にかけて葉を落とす。私の家の裏手には、玉樟の大樹があつて、これが、大量の葉を落とす。小さな平家の屋根に散り落ちて、樋をふさいでしまふ。時々掃除せねばならない。うちの者は、あぶないから止せといふが、私は屋根に登つて、落葉を掃き落とす。十年來の病人生活で足がふらつくと云つても、その位のことは出來る。

屋根に登るのが、實は私は好きなのだ。四方が眺められるからである。樋の掃除を終つても、私はなか〳〵降りない。四方をきよろ〳〵眺めてゐる。

東と北は、國府津を起點に松田で終る曾我山といふ低山のつらなりがあるだけで、左したることも無いが、西の富士、箱根、足柄、南の相模灘は好い。どつちかと云へば西がいい。南も惡くはないが、國府津、酒匂、小田原とつづく海岸までの直徑約三キロの平野が、昔とは大分變つてしまつた。印刷局だの大同毛織だのといふ工場が出來て、煙突なぞも立つて、眺めは可なり損はれた。海そのものも、昔は白帆が浮いたり、三浦三崎から來て、小田原、眞鶴、伊東と通ふ百トンぐらゐの汽船が國府津にも寄り、ボーと汽笛を鳴らしたりしたものだが、今は無い。夜は必ず見えた點々たる漁火も、今は無い。

西方は、昔と變らない。强ひて云へば、富水、栢山あたりの、酒匂川の堤防の松並木が、いくらか疎らになつたかも知れない。

私は、中學を出た年に上京し、以後は、時々歸省はしたが、大體東京で暮らした。學校を卒へると、尙更鄕里から足が遠のいて、爾來二十何年間の東京暮らし。戰爭末期に病氣になつて、漸くこの地へ引

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com